

# 人間の実存の誕生に関する試論(1)

——人間誕生の生物学

大津真作

人間は、生来のものであるばかりでなく、獲得されたものでもある。

ゲーテ

どのような人間も一〇年早く生まれるか、一〇年遅く生まれるかで、その教育と行動範疇においてまったく別人になる可能性がある。

ゲーテ

## 人間の偶然的誕生

人間は、父と母があってはじめてこの世に生を受けることができる。この単純きわまりない生物学的事実は、今日の生物学においてのみならず(1)、人類社会論を決定するような、きわめて深遠な哲学的規定性を包摂している。そこからは、まさにリチャード・ドーキンスが言うように、「奇妙で予期せぬ事柄が」おびただしく出てくるのである。現在に生きるわれわれは、すべて「成功した祖先のとぎれることのない一本の線分」を、疾風怒濤の時代を越えて、受け継いできて、現在ここにあるからだ。もちろん、失敗し、「とぎれ」た「線分」は、いまはもう存在しない。このことは、人間の家族だけではなく、あらゆる生物種について、妥当する真理である。この生命の世界でも、「現実的なものは合理的であり、合理的なものは、現実的である。」(ヘーゲル) いまある自分は、一本の「合理的な」線分で、遠い祖先とつながることによって、「現実的なもの」となっているのである。

しかし、このように、「線分」の延長は、合理的であり、したがって、必然的であるにもかかわらず、いまの自分が誕生するというのは、大いなる偶然であ

る。

まず、第一に、人間個人は、誕生にあたって、大いなる偶然に左右されているように見える。子供が誕生すべき父と母および空間と時間、そして子供が誕生とともにほめこまれる周囲の環境、さらに誕生そのものの必然性などは、まったく存在しないし、少なくともわれわれには、子供の誕生は、そのように偶然の配慮——配慮する幻想的主体がいるとして——の産物であるかに見える。つまり、子供の誕生は、カップルにとっては、まったくの偶然事と映る、ということである。偶然事であるからこそ、あれほど多くの子供を望む人びとが神社——そこに配慮主体が住んでいる——に子宝に恵まれるように、安産できるように、願をかけるのである。出産が重力の必然性に従っているのであれば、だれも神社に出かけたりはしない。

この場合の「偶然」という概念は、もちろん、現象がなんらかの主体の意識および活動に依らず、当の主体をも包摂する大自然の摂理と呼ばれる、より大なる必然性に盲目的に従う、という意味での偶然であって、けっして、選択が<sup>さい</sup>賽の目のように本質的に恣意的になされたがゆえに、われわれには、偶然と思える、という意味での偶然ではない(2)。後者の意味での、純粹の偶然は、世界には存在しないことに注意しておこう。徹底した必然論者スピノザは、人間の誕生を次のように適切に表現している。

「人間の本質は必然的存在を包含しない。言いかえると、自然の秩序に従って、この人間またはあの人間が存在したり、存在しなかったり、することが起こりうる。」(『エチカ』、第2部、公理1)

スピノザが言う「自然の秩序に従って」とは、人間を包摂する全自然の法則に従うことを意味する。そして、この法則は、人間には絶対に改変しえない、人為を越えた法則である、という意味で、その法則の作用がさしあたりは、無力な存在である人間カップルには、偶然事と見えるということである。

偶然性によって擾乱させられることが一切ない自然の秩序は、完全な必然性によって、すみずみまで、支配されている。だが、限界ある人間カップルには、自然の壮大な因果関係の連鎖を把握することができない。だから、子供の誕生

が偶然事と見えたり、子供が天からの授かりものだと思われたりするもの、当然の話なのである。

## 特別な使命を持つ子供？

このように、たまたま、あるカップルに子供が誕生するわけだから、「召命」もしくはある特別な使命をあらかじめ持っている子供、必ず誕生しなければならない子供など存在しないのである。もしも、だれか地上に必ず誕生しなければならない人間がいるとすれば、たちまちその選択を定めた理由が問われることになり、世界の不完全さが露呈し、この新たに登場した人間的存在物によって、逆に世界の必然的秩序全体が崩壊してしまうことになる。この平等主義的出生が偶然による誕生の第二の意味である。つまり、どこかに存在すると仮想された選択主体によって、あらかじめ出生を約束された特別な子供もいないし、そのように出産を約束されたカップルも存在しないということである。

ところが、キリスト教では、キリスト（救世主）が地上に現われる必然性が語られている。しかし、ある人間の誕生が予言され、その誕生に、必然性が成立するとされたとたんに、人間は、その誕生の必然性について、理解不能・判断停止に陥ってしまう。東方の三博士は、イエスの誕生の必然性を星の運行から察知した。しかし、かくも明敏な彼らでさえも、イエスがどこに生まれたかは、知らなかった。イエスは、なぜ、ほかでもなくユダヤの地に誕生しなければならなかったのか、世界のこの地だけが欠陥を持っていたからか、だとすれば、なぜこの欠陥地が生じたのか、合理的に説明することはできない。同じく、イエスの召命の必然性は、想定することすらできない。神が天使を遣わして、マリアに懐胎させたことが必然的事実であるとするなら、イエスこそは、神によって予定された必然的人間存在であることになるが、残余の人間がなぜ偶然にしか誕生しないのか、説明することはできない。残余の人間も必然的に誕生するのだとすれば、この実存主義的投企の結果としての彼らには、すべて説明可能な存在理由がなければならないが、そのような宿命をあらかじめ背負ってすべての人間が生まれるとすれば、もはや世界は、すべて膨大な記憶装置によって、ことごとく説明できる、不動の書き割りの世界だということになってし

まう。そうでなければ、人間は、「実体的存在」ということになり、したがって永遠不滅の存在とならざるをえない。スピノザは、このことを「実体は存在性を必然的に包含する」と表現した。つまり、実体とは、即存在のことだ、というわけである。このような実体とは、それこそ全自然でしかありえない。

しかも、キリスト教でなぜ救世主が現われる必要性があったかという、それは、人類が神の掟に背き、世界を破滅に追いこんだからである。つまり、人類と神とは、敵対状態に落ちこんだのである。この神と人類との和解を成し遂げるべくイエスは、必然的に誕生する。換言すれば、神の被造物が神に背く事態が厳然として存在する、ということになる。これは、神の完全な能力と相反することになる。神は、世界すなわち人類をも含む全自然を完璧な形で作ることができなかった、と解釈することもできる。また別の解釈をとれば、神は、あらかじめ人間が神に背くことを知っていて、わざわざそのような不完全さを捨て置き、やがてときが熟して、イエスが地上に派遣された、とも考えられる。イエスはいわば世界の修理工である。しかし、いずれの解釈をとるにせよ、神の完全性に瑕疵が生まれることは避けられない。完全性と相対的能力とは、矛盾するからである。それゆえ、あらかじめ誕生が予定されているような子供は存在しない、と結論づけざるをえないのである。

## 自然選択の結果

人間が地球上のどのような環境の、どのような夫婦のもとに生まれるかは、偶然である以上、生まれてくる側に、一切、選択権はないことになる。もちろん、これもきわめて常識に属することであるが、その意味するところは、深遠である。もしも、選択権が生まれてくる側にあるとすれば、すべての人間がもっとも生きやすい環境を望むことになるだろうが、これは、自然界のなかで、人間という生物的存在を特別な位置に置く、想像することすら許されていない妄想である。

生まれてきた人間の側に身を置いて考えてみると、いま見たとおり、生む側には、まったく偶然しかない以上、生まれてきた側の人間には、どのような意味においても、誕生してきたことの責任は存在しない——むしろ避妊をしな

いカップルの責任ではあるが、しかし生むように心がけたからと言って、必ず生まれるというものでもない——し、生まれてきたことの責任を想像することすらまったくの妄想だということになる。地球上のどこに、どの民族に、どの文化に生まれつくか、その誕生主体の選択に任される要素は、ただのひとつもありません。この事実を考えてみると、自分という人間存在がいかに、世界の「盲目的」必然性の因果に完全に包摂されているかがわかる。誕生する時点での人間は、その意味では、将来を予測できない、まったくの受動存在であり、あらかじめ環境を選ぶ能力を欠いた存在である。したがって、誕生直後に人間が味わう苦しみや喜びにも一切、当人の選択権は存在しない。では、これは、どのような必然性の因果なのであろうか。近代の生物学がその必然性を示してくれている。

たまたま子供が生まれない夫婦もあり、たまたま子供が生まれる夫婦もある。それは、生物学的に考察すると、動物たちの繁殖とまったく同じ偶然の支配するところである。しかしながら、人間にとってのこの誕生という偶然事は、実は、全自然とくに自然環境の「介入」と「選択」の必然的帰結なのである。これをダーウィンは、自然淘汰もしくは自然による選択と呼んだ。これが人間の誕生を規定する第三の特性である。

『種の起原』において、ダーウィンは、この重要な概念を次のように環境論的に規定している。

「たとえ軽微ではあっても、他のものに対して、なんらかの利点となるものを持つ個体は、生存の機会と、同類を増やす機会とに、もっとも恵まれるであろうと、考えることができないだろうか。他方、ごくわずかの程度にでも有害な変異は、嚴重に棄てられていくことも、たしかであるように感じられる。このように、有利な個体的差異と変異が保存され、有害な変異が棄てられていくことを指して、私は〈自然選択〉あるいは、〈最適者生存〉と呼ぶのである。……

幾人かの著者は、〈自然選択〉という用語をまちがって理解していたり、この用語に異を唱えたりしている。彼らのうち、ある者は、自然選択が生物の変異能力を誘発すると想像してすらいた。自然選択とは、そういうものではなくて、

ある生活条件のもとで暮らす生物に、有利な変異が生じた場合に、その変異が保存されることを意味するにすぎない。……別の者たちは、変化を受けるのは動物の方なのに、選択という用語を使うと、動物の側における意図的選別を意味することになってしまう、と反論してきた。そして、植物は、意志作用を持たないから、自然選択は、植物に当てはめることはできない、などと強く主張されさえした！……私が自然選択を、ある能動的な力または神性のようなものとして語っている、と言う人がいた。しかし、惑星の運動を統べるものとして、重力という、ものを引きつける力について語ったからといって、だれがいったい、その著者に反論を加えるだろうか？ このような比喩的な表現をとったとき、それがどのような意味なのか、なにを意味しているのかは、だれにでもわかっている。だから、ここでもまた、〈自然〉という言葉が人格化されて受け取られるのを避けることは難しい。しかし、私は、多くの自然法則の、集積された作用と産物のことのみを意味させるために、〈自然〉という言葉を使っているにすぎない。そして、われわれによって、検証済みの諸事件の連鎖という意味で、法則という言葉を使っている。」(3)

つまり、自然選択または自然淘汰を、厳密に解釈するとすれば、自然選択とは、生物側の能動的反応（「意図的選別」）を意味するのではなく、生物は、あくまで環境に対して受動的で、たまたま環境に適合した生物側の変異だけが、たまたま環境に適切に対応しているがゆえに、優遇されて生き残る、ということの意味するにすぎないのである。ただし、選択を行なう側の「環境」もけっして、能動的に選択を行なうのではない。環境の力の方が圧倒的に強力なので、その効果が生物側を凌駕しているだけのことである。その意味では、多数はつねに強力である。

だが、ここで忘れてならないのは、ある生物個体群もまた他の生物個体群から見れば、ひとつの「環境」にはかならない、ということである。つまり、種同士あるいは個体同士は、みずからが存在することによって、どのような意図もないのに、それゆえに、受動的な存在であるにもかかわらず、生きるというただ一点において、おたがい同士が、相手の「環境」となることによって、なんらかの影響を環境に及ぼしてしまう、ということである。ダーウィンの「生存

のための闘争」というのも、主として、この個体・個体群のあいだの相互作用を意味している。

一方、生物個体群は、その存在、つまり生存そのものによって、環境に対して作用を及ぼす。ある意味で、個体群もまた、生命活動を行なうことによって、個体群自身にとって「害悪」となりかねない「汚染」物質を環境に対して、まき散らし、環境を変えてしまうのである。その典型的な例は、いまから35億—37億年ほど前に極微世界の王者であったシアノバクテリアである。光合成によって、生存し、地球上に繁栄してきたシアノバクテリアは、外部栄養（太陽光）であるがために、地球上に遊離酸素をばらまきつづけ、ついには、みずからの滅亡と多様な生物の誕生に適した環境を整備してしまったのである。

したがって、生命存在は、いくら微小な存在だからと言って、生きているかぎりには、生命活動（吸収と排泄）を行なうので、なんらかの物理＝化学的作用を環境に対して及ぼすのである。そのうえ、地球上に、たとえ微小だからと言っても、一個の生命体が誕生すれば、必ず、それが一定の空間を占めることになるから、もうひとつの誕生しようとする生命体は、別の場所でしか誕生しえないし、空間を共有することは、物理的に不可能なのである。その意味で、すべての生命体は、かけがえのない存在物であるということになる。

ダーウィンによれば、このような自然による、目的のない、非人為的な淘汰作用がもっともよく現われるのは、気候の変化が起こったときである。

「そこに住む生物の相対的な個体数はほとんどただちに変化をうけ、絶滅する種もあるであろう。……いくつかの生物については、その数的割合の変化は、気候そのものの変化とは無関係に、他の多くのものにいちじるしい影響をあたえるであろう……。その国の境界が開放されていれば、新しい種類が移住してくるにちがいない。……新たな、より適したものが自由にはいつてはこられないようになってきている場合には、もとからその地に住んでいた生物に、ほんのちよつとの変化でも起こりさえすれば、その変異種を優遇するスペースが生じたことになる。……」

われわれは、生活条件の変化に連れて、変異が増加する傾向にある、と信ずべきたしかな理由を持っている。……生物の側に有用な変異が生じなけれ

ば、自然選択には、なにごとにもなすことはできない。」(4)

だから、夫婦に子供が誕生するということは、生物種の個体数が環境によって決定されている結果であり、たまたま生存のための空隙が密集した生命空間のなかに、ぽっかりと口を開けたという物理的事実を示しているのである。環境条件が劣悪となれば、個体数は減少する。少子化である。

## 生存を賭けた闘争

自然は、どの種にも繁栄のための空隙を最大限保証しようと努力するから、生活環境に存在する空隙は、必ずなんらかの生物によって、埋められる。そして、生物の本質は、ダーウィンも認めるとおり、つねに、自分の種の自然な最大繁殖・最大成長である。こうして、それぞれの種が最大多数を占めるとき、「生存闘争」は極点に達し、減んでいく種が現われるわけである。ダーウィンの理論によれば、

「生存闘争は、有機体生物すべてが高率で増加する傾向を持つことからくる不可避的な帰結である。どの生物も、その本来の寿命のあいだに、いくつもの卵や種子を産出する一方で、その生存のある時期に、そして、ある季節または、たまたま、ある年に、破壊を蒙らなければならない。そうでないと、幾何級数的な増加の原理にもとづいて、たちまちのうちに、生物の数は、通常では考えられないほどの法外な数量に達し、どのように広い国でも、結果を背負いきれなくなる。このように、生存が可能である以上に、多くの個体が産出されるわけだから、どのケースにおいても、同種の個体同士のあいだで、あるいは、異なる種に属する個体同士のあいだで、あるいは、物理的生活条件と個体とのあいだで、生存闘争が持ちあがらざるをえないのである。」

その産出率の高さは、とうてい、算術的計算の比ではない。

「どの有機体生物も、きわめて高率で自然に増加していくので、もしも破壊さ



れることがなければ、たちまち地球は、たった一对のカップルから生まれた子孫によって、覆いつくされてしまうだろう。」(5)

それゆえ、自然界では、ネズミだけが「ネズミ算」的に、幾何級数的に増えるわけではない。ダーウィンによれば、すべての生物が例外なく、親から子へと子孫を幾何級数的に増加させる能力を持っている。

同じ計算を現代の人類学者マーヴィン・ハリスが人間について行なった。これは、簡単な複利計算である。サン族〔「ブッシュマン」は蔑称〕の控えめな人口増加率でさえ、年数さえ経てば、異常な数の人口を産出する。

「ボツワナのサン族のあいだでは、現在、人口増加率は年間0・5パーセントである。これは一三九年度ごとに約二倍になる率である。この増加率が旧石器時代末期の一万年間だけでも維持されたなら、紀元前一万年までに地球上の人口は、六〇四四六三〇〇〇〇〇〇兆人に達しただろう。」(6)

つまり、さわめて低率な人間の個体数増加率も、「自然」に任せておけば、いずれは、地球上を人間で覆ってしまい、ついには、地球を破裂させてしまうほどの数量の個体を産み出してしまうのである。人間は、不老不死でなくても、地球に満ちあふれることが可能なのである。

同じ計算を現代の分子生物学者クリスティアン・ド・デューヴがバクテリアについて行ない、現在地球上でもっとも繁栄している生物は、バクテリアである、との結論を導いている。

「バクテリアのゲノムは、高速で増殖するように『合理化』されている。……バクテリアはDNAの複製を停止することがなく、複製しながらその遺伝子を転写し、成長に必要なすべてのRNAとタンパク質の合成を続けている。最初の複製が終わらないうちに、もう次の複製を開始するものもある。……このような巧妙なしくみをつくり出した生物工学者は、自然淘汰であった。……バクテリアの一つの細胞が無制限に指数関数的な増殖を続けたとしたら、その子孫は地球の全表面を二日もしないうちに覆い尽くしてし

まう。」(7)

今度は、「指数関数的な増殖」である。極小生物であるバクテリアさえ、その異常な増加率のおかげで、まかりまちがえば、地球上を覆いつくしただろう、という補足を彼が付け加えていることは、自然の「よき力」の威力を十全に物語っている。自然が「よき力」であるゆえんは、それが次のようなからくりを備えていることにある。すなわち、生命存在の過剰な繁栄は、生命存在にとっては、排泄物の過剰な集積による環境変化を招き寄せ、結果的には、繁栄した種の減少または絶滅を引き起こす、ということである。

したがって、人間をも含む生物の誕生が自然選択という種にとっての最大幸福の結果であるとすれば、種の絶滅も、種の自然な最大繁栄・最大成長の必然的結果なのである。

このように、自然環境と生物個体は、一体のものであり、そこには、どのような選択「意志」も働いてはいない。というよりも、万能の自然は、みずからが包摂している各生物の利益のみを図るように作用する、ということである。それが自然だからである。

「〈自然〉は、外見が生物にとって有用である場合は除いて、外見にいささかの顧慮も払わない。〈自然〉は、どのような内部器官にも、どのように軽微な体質的差異にも、生命の全体的からくりにも、作用を及ぼすことができる。人間が自分の幸せのためにのみ生物を選別するのに対して、〈自然〉は、自分が面倒を見ている生物の幸せのためだけに選別を行なう。」(8)

このダーウィンの比喩は、きわめて意義ぶかく、そのうえ、感動的ですからある。それが自然なるものの本質、その無差別的な普遍愛としての本質を的確に表現しているからである。つまり、カップルのあいだに、たまたま誕生する子供は、「〈自然〉が面倒を見ている生物の幸せのためだけに選別を行なった」結果にはかならない、ということである。誕生してくる子供は、どのような「外見」をしていようが、どのような体質を持っていようが、すべて生物学的には、完璧な環境対応型の幸せな、そして幸せに生きる権利と運命を持った存在物な

のである。別の角度から言えば、ある環境のなかに偶然誕生する子供は、すべて生きる権利をあらかじめ備えているということであり、いかなる人間にもその生命を奪うことは、許されていない、ということである。非人格的な〈自然〉が普遍愛を持つ神のような存在である！

## 共同体の宝

さらに、この生物界の聖書とも言うべき『種の起原』は、ともすれば、非情かつ酷薄なものを受け取られがちな自然選択のダイナミズムが人間とその共同体にとっても、きわめて有益で、いわばヒューマンな作用であることを、次のように指摘している。

「自然選択は、子供の構造を親との関係で変化させ、親の構造を子供との関係で変化させるであろう。社会性動物においては、自然選択は、選択された変化によって、共同体が利益を受けるのであれば、各個体の構造を共同体全体の利益にかなうように、変化させ、各個体を共同体に適応させるであろう。」(9)

これが偶然の産物である人間の子供の必然的な宿命である。個々の生命存在を超越した、より大なる秩序たる自然環境の必然的法則は、そのなかに包摂している生命存在が「社会的動物」である場合には、当該共同体の存続と繁栄に有利なように、生命存在をあらかじめ適応させておくばかりでなく、生まれ落ちてからは、親と子あるいは家族と共同体とのあいだに交互作用を引き起こし、それぞれが環境に適切に対応して生きていけるように、ここでもまた、「選択」という名の厳格な生物学的「配慮」を行なう、ということはこの言葉は意味している。そして、この作用は、結局は、誕生した子供全員について、分け隔てなく、妥当するものである。つまり、個々の社会的動物にとっては、共同体もまた、みずからを包摂する環境である以上、この環境の利益にかなう方向で調整された子供しか誕生しないことになるのである。生物学的に考察された人間の場合も、このことが妥当する。人間が生まれ、生きているという現実の、それこそが意味なのである。それ以外では、人間は、生まれることも、生存す

ることもできない。

## 変化は自己利益

では、環境のなかにすっぽりと収まる子供の側から、生物学的自然選択を見てもみると、どういうことになるだろうか。環境による変化とそれの子供への影響は、子供の力では、どうにもならない宿命なのであるが、しかし、子供主体から、この宿命を見たとき、それは、けっして自己にとって不利益なことではないのである。むしろ、どのような変化も、したがって、どのような自然選択の結果も、すべて子供の利益のために生じているのである。ダーウィンは、『種の起原』の第六章で次のようにこの点を端的に指摘している。

「自然全体を通じて、ある種が絶えず他の種の構造を利用し、それによって利益をえているにもかかわらず、自然選択は、ただ他の種の幸せになるというだけで、ある種になんらかの変化を起こさせるなどということはありえない。」(10)

つまり、本質的に生物の変化は、自己利益のみを考慮して生じるということである。自然とは、自己利益のことであるとは、スピノザの定理でもある。スピノザのコナツスの原理は、個々の生命存在は、生存のために最大限の努力をつねに払っていることから成立している。ところが、この自己利益は、他者にとっては、外部環境であるために、しばしば他者によって、有利な形で利用されてしまうというわけである。この事態を人間主義的観点から見ると、あたかもある種が他の種に奉仕するために存在している、と誤解されるわけである。

さらに、自己利益としての生物における変化は、生活条件に合致しなくなったときに、環境に対応する変種が発生していなければ、無目的な自然は、選択すべき変種を持たないことになり、こうして、種は、自然に絶滅することになる。ダーウィンは、これを次のように説明している。

「自然選択は、ある生物にとって利益になるよりも、害となるような、いかなる構造も、生物のなかにけっしてもたらさないであろう。というのも、自然選

扱は、生物それぞれの幸せを図ることを通じて、その幸せのためにのみ働くからである。……時が経ち、生活条件が変化することによって、生物のどこかの部位が自身に害を及ぼすようなものになると、それは、やがて変化させられるであろう。もしもそうならなければ、かつて巨万の生物が絶滅したように、その生物も絶滅するようになるであろう。」(11)

したがって、現実には生きている生物は、あらゆる意味において、自分のためだけに働いてくれる自然のなかで、自分のためだけに生き、やがて絶滅していくのである。

## 環境の産物

誕生してきた主体が環境に適切に収まっているということから、それでは、この人間主体は、どういうものであると考えなければならないか、人間存在の本質的規定がそこから導き出されるのである。すなわち、人間存在は、誕生以来、環境の産物となる、ということがそれである(12)。つまり、誕生したばかりの人間は、必然的に——これ以後は、だれの目にもわかるような必然でしかない——周囲の環境のなかに組みこまれ、否応なく新生児をめぐる一切の環境を、本人の意志や欲望とは無関係に、そのまま一身に背負ってしまう、ということである。

たとえば、戦争の環境に生れ落ちた子供は、本人に一切責任がないにもかかわらず、爆撃で殺されたり、飢餓で死んだり、地雷に触れて死んだりする。このように悲惨な例でなくとも、人間の精神能力のなかで、きわめて重要な位置を占める、言語能力を取りあげてみても、何語を母語とするかは、生まれた環境によって決定されているのである。その他、誕生したばかりの人間が備えているあらゆる生物学的備えも、ただちに環境の産物となる。あるいは、そのように理解することができるようになる。肌の色、目の色、髪の毛の色から身の丈まで、ありとあらゆる要素がすべて、本人の選択に依らない。ただし、今度は、その必然性は、火を見るよりも明らかとなってしまいます。黒人のカップルから白人が生まれることはない。戦争の環境に生まれた人間が爆撃で殺されて

も、それは必然であり、偶然ではなくなる。つまり、人間は、偶然に生まれついた環境のなかで、必然的にその環境を表現する存在となる、ということである。いったん、他者の表象的観察に引っかかる存在となった新生児は、他者の目からは、これ以降すべて、必然の因果に包摂された存在と映ってくる。これからは、すべてが必然因果のスピノザ的世界が現出するのである。

## 受苦的存在として

しかし、生まれ落ちて、可視的存在となるや、ただちに環境に包摂され、こうして、環境を象徴する存在となる、この子供存在は、ひ弱であるがゆえに、四囲の環境からの被害者になっている。しかし、忘れてならないことは、こうした子供存在が成長して、成人となり、ある程度、環境に働きかける能力を身につける存在になりえたとしても、本質的に人間は、受苦的・受動的な存在なのである。存在物の孤独な個性およびその感覚器官が存在物自身を他者をも含む環境の力の被害者とするのである。

実存主義者が得意とするこのテーマをきわめて印象的にスペインの哲学者オルテガ・イ・ガセット——今後も頻繁に引用される——は、このように、語っている。

「人間的生はつねに各人の生であり、個人的もしくは人格的生であって、各人の自我がある環境——われわれがふつうに言うところの世界——の中に存在しなければならないということ、次の瞬間にも存在するという確実性もなしに、そしてその存在を確かなものとするためにはつねに何かを——物理的もしくは精神的に——しなければならないということである。そうした行為、行動もしくはふるまいの総体がわれわれの生なのだ。」(13)

このオルテガの指摘は、人間的生が「持続」、言い換えると、時間のなかで、営まれていることの不安であり、スピノザ流の「永遠」のもとで、われわれが生きていないことのアカシである。永遠の相のもとで生きるためには、理性を働かさなければならない。しかしわれわれには、必然的に身体という、必滅の

物質が備わっている。それは、持続の物質的世界に生きているのである。したがって、人間の身体には、存在の必然性がないわけだから、人間が生きて、生き抜くためには、どうしても、瞬間ごとに、行為という名の努力を払わなければならない、ということである。それが持続の意味であり、永遠との根本的相違なのである。

しかし、この生き抜く行為自体は、ダーウィンの生存のための空隙のなかにすっぽりと収まって、展開されるので、たとえて言えば、これは、他者の身体という物質と、環境という物質の双方が密集した空間のなかで、自己という身体的物質が周囲の圧力を感じている、という様相を呈する。つまりは、周囲の圧力の原因を知りえないあいだは、人間は、つねに受苦的な存在として、被害のみを感じながら、生きているということなのである。これが、自己意識には、「自分をつねに善行をしている」という風に反映される。とはいえ、密集空間である以上、みずからの生へのもがきは、他者と環境に対する攻撃でも、当然ある。しかし、当の本人には、みずからの生への努力は、基本的にみずからにとつての「善」であるから、他者と環境への攻撃と感ぜられることは決してない。相変わらず彼が感じるのは、他者と環境の抵抗力だけである。ただ理性のみが、みずからの生への努力が同時に他者に対する攻撃でもあることを推理できる。そこから群集社会での調整が始まり、文化が始まるのだが、このことの研究は、別の機会に譲ることにする。

## 父母の父母

最後に、父と母があつてはじめてこの世に生を受ける、という生物学的事実には、歴史時代を過去へと戻っていき、ついには、最古の時代にまで遡る問題を含んでいる。いわゆる人類の系統樹の問題である。ここで、奇妙な背理が生じる。たとえば、人間は、男女のカップルから子供が誕生する有性生殖である。そうすると、現在の自分には、父と母がいるが、その父と母にもそれぞれ父と母がいたことになる。このように考えると、先祖に遡っていけばいくほど、ネズミ算式に、父と母が増えていくことになる。たったひとりの自分が存在するためには、平均して25歳で子供が生まれるとすると、1世紀に4世代が子供を

生まなければならないので、2の4乗の父母が存在することになる。この調子で計算していくと、たとえば、イエスが生誕した紀元ゼロ年までに、80世代が経過したことになり、それだけでも、2の80乗の父母人口が必要となる。まして、現生人類発生までに遡ると、この数字は、天文学的な数字となる。この明らかな背理から、ドーキンスは、ハリスの嬰兒殺しとはちがって、生命学者らしく、人類の近親結婚を想定している。

「実際、われわれは、かの近親（いとこ同士の）結婚を失念していたのである。私は、われわれのだれもが8人の曾祖父母を持つ、と仮定していた。しかし、いとこ同士の結婚ならひとりの子供は、6人の曾祖父母を持つだけである。」(14)

実は、ダーウィン自身も、陶器で有名なウェッジウッド家のいとこを妻にしている。このように、「われわれの単純な計算が暗示しているより、はるかに少ない数の先祖を持っている」(15)ので、まぎれもなく、人類は、みな兄弟であり、その起源は、「アフリカのエバ」と呼ばれるように、アフリカに存在するのである(16)。しかも、計算上は、いまから1000年前には、ほぼ確実に、われわれは、われわれの友人とは、親類だった、ということになる。

ダーウィンもみずからの学説を、一本の巨大な「生命の大樹」(『種の起原』、第4章、「自然選択あるいは最適者生存」の末尾「総括」)にたとえることを好んだ。というのも、多数の枝先の葉が現代のわれわれであるとすれば、過去に遡るにつれて、樹木の幹は、太くなるが、それはちょうど、現代の生物多様性から、往古の単一性(バクテリア?)へと遡っていくことにたとえられて、都合がよいからである。ダーウィンによれば、大量発生する種は、多様性がそれだけ希薄だということである。

つまり、この大樹の多数のさまざまな形をした葉(つまり、われわれ)には、ある期間育って、絶滅してもういまは生きていない、おびただしい種類の枝や葉が幹の方についていたのである。すさまじい最適者生存のための闘争とその結果としてのわれわれの多様性を、ダーウィンは、次のように描き出した。



「おなじ種類に属する全生物間の類縁関係は、一本の大きな樹木で表わされたことがあった。……緑色で新たに芽を出した小枝は、現存する種を表わす。以前の年月に生じた小枝は、絶滅種の長い連鎖を表わしているだろう。成長の各時期において、成長しつつあるすべての小枝は、あらゆる側に枝わかれしようと、周りの小枝や枝をしのぎ、それらを滅ぼそうとしてきた。それは、ちょうど、生存を賭けた偉大な戦いにおいて、種と種の集団がいついかなるときでも、他の種を圧倒しようとしてきたのと、同じ様相を呈していた。太い大枝が大きい枝に分かれ、それらが次第に、より小さい枝に分かれていくが、これらの太い大枝自身もかつて、樹木がまだ若かったときには、芽生えつつある小枝であった。以前の芽と現在の芽とが、分岐する枝によって結合されているということは、あらゆる絶滅種と現生種とが、他の集団に従属した集団へと分類されていく様子を、よく表わしている。樹木がまだ低木であった時代に繁茂していたたくさんの小枝のうち、わずか二本か三本だけが、いまでは大きな枝に成長し、生きつづけ、他のすべての枝を支えている。それと同じように、はるか遠い地質時代に生存していた種のうち、ごく少数のものが、現生の変化した子孫を残している。木が成長をはじめたとき以来、多くの太い大枝や枝が枯れて落ちた。……芽は、成長して新しい芽を生じ、これらの新しい芽は、もしも強壮ならば、あらゆる側に分枝してそれより弱い多数の枝を滅ぼしていくと同様に、〈生命の大樹〉も世代を重ね、枯れ落ちた枝で地殻を満たし、分枝をつづける美しい枝えだで地表を覆っているのであると、私は確信している。」

このように、いまのわれわれは、すべて最適者生存の結果として、長い因果の連鎖を通じて、太古の昔にまでつながっている、ということである。しかも、それぞれのいまはもう存在しない、生命の枝や小枝は、なにも成長への努力が欠如していたから、滅んでしまったのではなく、それぞれが自然環境のなかで、精一杯努力した結果、時期が来て、滅んでしまったのである。人類もまた同じである。

父と母には、当然のことながら、その父と母が存在するし、このように推論を進めていくと、われわれは、人類の発生にまで遡ることができる。すなわち、われわれがいま「生きて、在る」(vivo et sum)ということは、人類発生時に、

すでに、人間となるべく、そのDNAが決定されていた、ということである。つまり、生物学的したがって物体的人間は、生命の系統樹において、人類進化の特異な、世界でたったひとつの、樹液を受けた個別存在である、ということである。しかもそれが根源において決定されていたのである。先ほどの、ド・デュヴは、ダーウィンのように、生命の一本の木を想定し、われわれの共通の祖先は、バクテリアである、とも言っている。このバクテリアから出発して、ついには、アフリカにおける猿人から現生人類となり、そこから膨大な環境変化をかいくぐって、今日の私の「生」となったわけである。

このような人類の発生時についての想像だけではなく、われわれの先祖が江戸時代にも生きており、鎌倉時代にも日本のどこかに生きていなければ、今日のわれわれは、存在しない、という自然必然的事実について、想像をめぐらすのは、大変楽しいものがある。

しかし、このことは、同時に、われわれの先祖がいかにも環境に適応して、生き延びてきたか、その人間の環境適応能力について、舌を巻くほどの驚きをわれわれに与えてくれるのである。

われわれの先祖は、相次ぐ戦乱と飢饉のなかでも、また、明治以来の対外戦争の惨禍のなかでも、敗戦前後の悲惨な状況のなかでも、生き抜いてきた。だからこそ、現在、われわれがいま生きて、在るのであり、そして、いま生きて、在るということは、なにものにも代えがたい価値を持っている。われわれは、代替不能にして、反復不能な存在価値を持っている。生きているのは、私なのである。そして、生きている、そのような「私」は、同時に他者でもある。他者もそのようにして、生きている存在であるからだ。これは、徹底したヒューマニズムの思想的根拠となる。

## 注

- 1 Cf., Richard Dawkins: *River out of Eden, A Darwinian View of Life*, Basic Book, New York, 1995, pp.1-2. 「生まれ落ちた、すべての有機体のなかで、大半のものが成熟年齢に達する前に死んでいる。生き残って子供を産む少数のものの中で、さらにごく少数のものがこれから1000世代も生きる子孫を持つであろう。・・・われわれの祖先のうち、ひとりとして若くして死んだものはいなかった。彼らはみな成人し、どの個体も少なくともひとりの異性のパートナーを見つけることができ、性交することに成功した。われわれの先祖は、少なくともひとりの子どもを世に送り出すまでは、ひとりと

して敵の手に落ちなかったし、あるいは、ウイルスにやられなかったし、あるいは、断崖絶壁で判断ミスをおかして足を踏み外してしまうことはなかった。祖先の同時代人の1000人がこれらのあらゆる面で、失敗した。しかし、われわれの祖先のたったひとりだけは、そのどの面においても失敗しなかった。これらの言明は、目をくらませるほど明々白白たるものであるが、しかしながらそこから多くの事柄が帰結する。奇妙で予期せぬ多くの事柄、説明に役だつ多くの事柄、驚かせる多くの事柄が。」

- 2 後者の偶然は、「純粹の偶然」と呼ぶことができる。この偶然は、たとえて見れば、さいころを無限回振れば、1が出る確率と6が出る確率とが同じである、という前提のもとに、たまたま、いまさいころは、4の目を出した、という事象について言われるような「偶然」のことである。

この場合、無限回というところに、すべての謎が隠されている。スピノザ的な哲学的論理から純粹偶然を思考するならば、この場合、無限を、人間の表象レベルで考えてはいけない。真の無限とは、永遠であるから、始まりも終わりもなく存在していることの言い換えにすぎない。この意味で解釈された永遠の世界では、さいころを振りつづけることも、明らかにナンセンスなのである。そして、存在性は、合理性の言い換えにすぎないから、そもそも純粹偶然は、「永遠の相のもとで」見ても、存在しえない。

では、人間にかかわる無限回とはなにかというと、それは、明らかに数学的無限にすぎない。つまり、人間の表象レベルでの無限回でしかない、ということである。

たまたまここに粘り強い人間がいて、ギネスブックに挑戦して、10万回さいころを振ったとしよう。数学者は、それに一回を足してほしい、と言うであろう。つまり、数学的無限とは、有限回に、さらにたえまなく有限数を付け加える作業を意味しており、この意味での無限は、所詮、有限回の想像的延長でしかないのである。だから、人間によるさいころ振りの確率論は、「有限回しかさいころを振れない人間が、もし無限回さいころを振りつづけることができたら」という仮定のうえに成り立つ単なる想像——たとえ科学的・数学的との形容詞をつけたとしても——にすぎない。これと、スピノザが言う神の永遠性としての無限とを混同してはいけない。

人間の表象レベルで、無限回をとらえるなら、われわれ有限存在は、明らかに、この無限回を実現することはできない。われわれ有限存在には、無限回さいころを振ることなどとうていできないので、光速に近づいた物体に起こるとされているアインシュタイン効果のように、無限に近づいたときに、なにが起こるかは、わかっていない——おそらくさいころは、ある時間がくれば、摩擦して消滅してしまうだろう——し、おまけに、現実のさいころ振りは、当然のことながら、時空の制約を受けた、必然の支配する世界での出来事としてのさいころ振りである。具体的に存在する個々のさいころは、さいころを作った人間が存在する以上、たがいにまったく異なる「唯名論的」存在物である。つまり、個々のさいころは、みな歴史的・空間的制約のもとに置かれた独自のさいころであり、確率論の前提をそもそも満たしていないのである。そのうえに、歴史的・空間的制約のもとに置かれた人間が振るさいころである。たまたま腕の力が強い人間と弱い人間とが同時にさいころを振ったとしたら、当然のことながら、確率に異変が生じるだろう——だが理想の無限回振りつづければ、両者の確率は同じになる！

だから、人間の表象における、いま出た4の目も、純粹偶然の産物ではなくて、より大きな時空的必然によって、包摂されている必然の結果なのである。そして、なぜいま4の目が出たかは、人間には、いずれは、解明できる事象である。人間にとって解明可能な事象を、偶然と呼ぶことはできない。なぜなら、まさしくカント的背理だが、真の純粹偶然は、人間には、とらえることが絶対に不可能だから偶然と呼ばれているにすぎ

ないからである。そして、この意味での純粹偶然は、たとえ本当にそれが生じていても、永久にわれわれの目に映ることはない。目に映り、五感でとらえることができるものは、すべて必然である。なぜなら、現象をとらえる側は、頭のとっぺんからつま先まで、具体的な規定性の固まりとしての、つまりは、必然的有限存在であるからである。この必然的有限存在の目をもってしては、純粹偶然なるものを物理的・存在論的に把握することはできない。目に映るもの、存在しているもの、それらはすべて合理的であり、理性的である（ヘーゲル）。そうでなければ、それらのものは存在すらできないからである。

これは、同時にスピノザの哲理でもある。カントは、『純粹理性批判』において理性のアンチノミーを提出したが、その第一アンチノミーを考えてみても、これは、理性のアンチノミーでもなんでもなく、人間の五感によっても、通常の理性（カントはこれを悟性つまり理解力と呼ぶ）によっても、把握できない純粹無限を、いわば「超越界」に想像的に設定しているだけのことだ、ということがわかる。「超越界」が存在しないスピノザにとって見れば、純粹無限は、純粹偶然というエセ概念と同じく、徹頭徹尾、理性の精神界の思考対象でしかない。ここがカントとの決定的相違点で、カントは、超越界に対抗して実在する——いや厳密に言うとは、これは実在するのではなく、表象ないし觀念のヒュームの連鎖にすぎないのだが——現世としては、「現象界」しか認めない。現実世界が「現象界」ということになれば、これはもう「現象の絶対的実在性」なき、「単なる表象にほかならない」（*Kritik der reinen Vernunft*, S.564-565. [邦訳、『純粹理性批判』、篠田秀雄訳、岩波文庫版、中、210ページ]）世界であって、ここでは、カント的理性は、人間の創造的自由を必然性に対抗するかたちで想念できる、というわけである。

スピノザによると、神的無限、永遠性、必然性等々の概念は、精神界の対象として、理性によってのみとらえることができるのである。その場合、超越界には存在しない世界内在的人間理性は、同語反復的だが、理性的なものしか把握できない——カントが思い悩んだ理性の限界とは、理性が理性的にしか思考できないという同語反復的仮想限界である。すでに理性の枠組みは、決定されていて、この世界を理解する精神的武器として精神界に存在するのである。結局、実在世界を理性が考察する場合、はじめから、この世界は必然性により成り立っている、としか把握できない。理性即必然的推理であってみれば、これも当然の帰結と言わなければならない。繰り返し言えば、理性には、純粹偶然は理解不能なのである。

恣意的選択の意味でも、純粹偶然という概念には、実は、大きな難関が立ちはだかる。超越神なら、人間には、計りがたい「意志」によって、自由に、選択をなしうるかに見える。しかし超越神といえども、論理的には、超越界においてしか、恣意的に振る舞えない。現実世界にもしも超越神の意志なるものが働こうとしても、カント的現世には、厳然たる必然性の法則が支配しているから、それゆえに、神もこの必然の法則に逆らうことはできない。スピノザが言うように、万物が全自然の一部として内在するかぎり、これらの事物に恣意的偶然が生じることは、ありえないのである。

カントは、唯一の抜け道を用意してくれている。しかし、この抜け道には、人間にとっては、恐ろしい陥穽が待ちかまえている。カントは、『純粹理性批判』の、有名な第3のアンチノミーで提出された命題は、実践的にしか「解決」されえないとして、『実践理性批判』の「純粹実践理性の分析論」を批判的に解明する節において、上記の実在性なき現象界に生きる生物のうち、人間にだけ特別の能力（理性）を授けることによって、単なる因果律に左右される、「物質的自動機械」——デカルトを彷彿とさせる——ま

たは「精神的自動機械」——ライブニッツを彷彿とさせる——とは違う地位に人間を位置づけている。こうすることによって、人間にだけ、「回転式焼串器」(Bratenwender)のようではない、根源的「自由」が認められることになるが、そのかわりこの「自由」には、恐るべき(?)対価がある。それは、客観的な「道徳法則」というもので、なぜか——驚くべきことにカントは、人間存在を「現象人」(フェノメノン)と「本体人」(ヌメノン)とにわけること、その理由を説明する——人間理性だけがあらかじめこれを承知ないし理解している、というのである。この正義の法廷もどきは、人間の精神の内部では、「道徳的格律」となり、それを自覚する精神作用は、「良心」となる。この外部と内心両方の裁きで、人間の行為全般が善か悪かにわけられ、それとともに賞罰が決定されるわけである。つまり、人間にのみ、現象的因果律から離れる自由があり、行為を選択する自由が認められるかわりに、行為の責任が生じるというわけである(Cf. *Kritik der praktischen Vernunft*, S.159-191. [邦訳、『実践理性批判』、波多野精一、宮本和吉、篠田秀雄訳、岩波文庫版、184-218ページ])。この小市民的道徳観の腐朽した形態には、現代でも至るところで、お目にかかれる。それによれば、どのように苛酷で、貧窮した環境のなかでも、人間には、動物と異なって、つねに善なる行為を行なう責任があり、善行を選ぶことのできる能力が備わっている、というのである。つまりは、人間を取り囲む環境には、なんの責任も帰せられず、もっぱら悪いのは、そして、責任をとり続けなければならないのは、そのような劣悪な環境をもたらした、本人にとっては外部的な要因(とくに為政者)ではなく、犯罪を選んだ本人(犯人)だけだ、ということになるのである。以上の点については、善悪問題を取り扱う論考で詳論することになる。

- 3 Ch.Darwin: *The Origin of Species*, 6th ed.1876, London. (Signet Classic, New York, 2003. p.88.) [邦訳参照、『種の起原』、八杉龍一訳、岩波文庫版、上巻、112ページ] 『種の起原』の邦訳は、第1版を底本としている。本書では、邦訳を参照しながら、最新版である英語第6版も必要に応じて訳出した。なお邦訳では、訳注において第6版までの異同が簡略化した形で示されている。
- 4 Ch.Darwin: *op.cit.*, pp.89-90. [邦訳参照、前掲、112-114ページ]
- 5 *Ibid.*, pp.76-77 [邦訳参照、前掲、89-90ページ]
- 6 Marvin Harris: *Cannibals and Kings, The Origine of Cultures*, Vintage Books, New York, 1991, p.24-25. [『ヒトはなぜヒトを食べたか』、鈴木洋一訳、ハヤカワ文庫版、35ページ]
- 7 Christian René de Duve: *Vital Dust, Life as a Cosmic Imperative*, Basic Books, New York, 1995, pp.125-126. [『生命の塵』、植田充実訳、翔泳社刊、190ページ]
- 8 Ch.Darwin: *op.cit.*, p.91. [邦訳参照、前掲、115ページ]
- 9 *Ibid.*, p.93. [邦訳参照、前掲、119-120ページ]
- 10 Ch.Darwin: *op.cit.*, p.190. [邦訳参照、前掲、259ページ]
- 11 *Ibid.*, p.191. [邦訳参照、前掲、260ページ]
- 12 このパラドキシカルに見える事態を正確に理解しなければならない。人間個人の誕生が偶然で、誕生の直前まで、その必然性が理解できずに、偶然と映るのは、誕生前の胚芽状態は、ともかくとして、外面的には、どのカップルに誕生するかが他者には見えないものであるからにすぎない。まだなにも存在しない状態で、誕生を予測せよ、と言えば、それは、エセ科学となる。ところが、いったん嬰兒の形となり、だれの目にも存在が確かめられるようになると、それを見ている他者には、誕生した人間存在の必然性が見えてくるのである。黒人のカップルに、完全な白人が生まれるのであれば、偶然的奇

蹟、神の配剤と考える人間も出てくるかもしれないが、人間が形をなしたとたんに、当の人間を取り囲む必然性の因果はすべて可視のものといずれはなる。なぜなら、そこに人間存在は見えているからである。

- 13 J.Ortega y Gasset: *El hombre y la gente*, Revista de Occidente, Alianza Editorial, 1957, p.13. [邦訳、『個人と社会——人と人びと——』, アンセルモ・マタイス, 佐々木孝訳, 白水社刊, 9ページ]
- 14 Richard Dawkins: *River out of Eden, A Darwinian View of Life*, Basic Book, New York, 1995, pp.33-35.
- 15 R.Dawkins: *op., cit.*, p. 35.
- 16 ただし、このエバ仮説に対して、混血による多地域進化説が唱えられて、論争になっている。1987年のミトコンドリア・エバの論証によって、単一アフリカ起源説が学界の主流となりつつあるが、いずれにせよ、人類がみな兄弟であることに変わりはない。この点からもありとあらゆる形態の人種主義思想がすべてまちがっていて、愚かな思いこみにすぎないことがわかる。「優越」人種も「劣等」人種も、混血かまたは単一起源かの祖先を持つからである。